

9

日本
国語
大辞典

さきーしとん

日本國語大辞典

第九卷

発行 小学館

編集 日本大辞典刊行会

日本国語大辞典 第九卷

昭和四十九年五月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第二版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相賀徹夫

印刷者 小林清

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二一三一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

ささ【游】〔名〕水底にたまたかす。どる。おり。*東大寺謡誦文平安初期点心が内の淨土を我等が見ずして、恩人の游(ササ)の白玉を観ぬが如し」**襦袢**他用例がなく、あるいは「さざれ」などの下部省略表記形か。

ささ【笹・篠】〔名〕①イネ科のタケ属で小形のもの総称。一粒性で、高さ〇・二~六尺。根茎は地中を横にはう。稈(かん)は細長い中空の円柱形で節がある。葉は先のとがった狭長橿円形で基部は鞘(さや)となって程を包む。タケに対してもつら稈(かん)がのびきまるで竹の子の皮が落ちない。実はだんごにして食べ、稈(かん)はバルブにしたり種々の家具や器具をつくる。葉は粽(わまき)や鮎(すし)、和菓子を包むのに用いる。東アジア、特に日本には、各地に広く分布し、クマザサ、チシマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど種類も多く、しばしば観賞用に庭に植えられる。篠(しのぎ)。古事記上「天の香山の小竹葉を手草に結ひて小竹を訓(よ)みて佐佐(ササ)と云ふ」*古今物名・四五四「ささま(ひは)ばせをば、いさきめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつ(給乳母)」*卷本和名抄「一〇一篠(しのぎ) 蒼切韻云篠(しのぎ)へ先鳥反之乃小竹散々(しのぎ)小竹也」*名語記六「小竹をささとなづく如何。答、ささは篠也。小竹也」②〔酒〕〔中国〕で酒を葉(葉)と呼んだところから。また「さけ」の「さ」を重ねたものともいう。酒をいう女房詞。虎明本狂言・比丘貞「比よりやうが所へは、はうはうからささをたくさんにたるもの」*日葡辞書「Sasa(ササ)。すなわち、サケ(説)酒。女性のことば」*浮世草子・武家義理物語「二・三・御酒宴(うたに)に、もたねよりは、ささ(すこして)」*女中詞(元禄五年)「九月の酒と云」③紋所の名。竹の葉や枝などをかたどつたもの。三枚笛、九枚笛、根笛、雪持根笛、笛に雀などの種類がある。

④能楽や演劇の道具の一つで、狂女の持つて出る笛。狂い笛。また、宫廷神樂で用いた笛(ささ)。

〔5〕雜俳柳多留拾遺一卷十九「氣ちかひは絵にかく時は笛をもち」**内宮酒**。京都初和歌山県東牟婁郡新宮町広島県三原町おさ

さも少しあはるしゆうざります」*ササ(ササ)ダケ(細小竹)の下略。ササ(笛)は、ササ(小竹)が一種の竹の名として固定したもの。「大言海」。ササ(小竹)の義「日本紀名・名言通・和訓英・(2)葉の触れ合



う音から「和句解・古事記伝・大言海・日本古語大辞典」松岡静雄・音幻論・幸田露伴)。(3)シカシタ(然下)、またはンパンタ(柴下)の反(名語記)。(4)サンノハ(小篠葉)の義「日本古語源学・林龜臣」。(2)について)(1)人に酒をする時のことばから「綜合日本民俗語彙」。(2)君にササグルの略語「紫門・和語類集」。(3)サケ(酒)のサを重ねた語か「古事記伝・和訓英・大言海」。(4)酒の異名「竹葉」を和語化した語か「嘉良齋隨筆・漫画隨筆・閑窓瑣談・和訓英」。(5)酔ぐが国語化したもの「日本語原考」(寺謝野寛)。*開闢(は)今史平安●●余之○同譯和名・色葉・名義・和玉・文明・伊京・明応・天正・鏡頭・易林・書

ささが根(ね) も親見出し

ささに観(あらわ)れ さわがしいことのたとえ。
*雛俳裏葉(宵葉師・笛に電の娘ども)

ささに雀(すすめ) 紋所の名。笛に雀のいる模様を因圖化したもの。*浮瑞・源義經・將某經・道行「さきに雀の趙(あ)じるし、やれにしきど兄弟よ」**癡道**

〔會之回〕

ささの青(あお) 製(かさね)の色目の名。表は白で裏は青。壯年の符衣に多く用い、春用いる時は柳葉(やなぎかさね)といい、冬は松の雪ともいう。

*雁衣鈔(布衣事)・略(篠青・同・柳) **開闢(は)之回**
之人着(之)・装束(抄)・篠青・同・柳 表白。裏青。三十四
ささの庵(いおり・いお) 笛の葉で屋根をふいた庵。草庵。笛の屋。*永久百首・秋「よしの山みねの嵐のはげしさにささの庵は露もたまらず(大進)」
*新古今・恋二・一一〇「逢ふことはかたの里のささの庵しのに露散る夜はの床かな(藤原俊成)」
*後成卿女集・真榮(たくささのいほり)の夕煙いとどかすかに吹く嵐かな」*玉葉旅一八六「かりそめと思ふ旅宿のささの庵も夜や長からむ露の置きそふ(藤原俊成)」

ささの魚(うお) 「ささうお(笛魚)」に同じ。俚言集覽「ささの魚飛驥國(鰐)より化する魚のよし」
ささの限(くま) (地名)ひのくま(檜隈)に接頭語「さ」の付いた「さひのくま」が「ささのくま」と誤られ、「笛の限」と解されたもの。生い茂った笛(ささ)によってできた物かけ。古今・神あそびの歌。一〇八〇「ささのくまひのくま河にこまとめてしばし水かへ影をだにみむ」*平中・三九「いつはりぞささのくまがましかば檜(ひ)の限(くま)川は出で見てさりき」*源氏・椎本「むつかしげなるささのくまを。駒ひきとどむる程もなく、うち早めて片時にまわりつきぬ」**襦袢**古今集の歌は「万葉集」一二・三〇・九七では「左檜限(さひのくま)檜(ひ)の限河に馬とどめ馬に水かへ吾よとに見る作者未詳」とある。

ささの子(こ) 筏竹(しのだけ)のだけのこ。小ささが柔らかで美味。笛子(すすのこ)。《季・夏》

ささの鯛(たい) 笛の先に、吹抜きの鯛をつるした玩具。

ささの露(つゆ) 〔1〕笛の葉におく露。*山家集一下「庵(あ)さす草の枕に伴なひてささの露にも宿る月かな」
〔2〕酒、または少量の酒をいう。統鳩翁道話「一上時にかの年よりは、酒と聞いては、笛(ササ)の露(ツユ)にも醉ふ程の下戸(じや)」**笛**もささのとあらはにおける萩の朝露」
ささの戸(と) 笛で作った戸。また、笛の生い茂った門戸。ささど。王二集「さきかくす野守が庵の親見出し

ささの葉(は) 〔1〕小さい竹類の葉。ささば。
〔2〕葉(は)一・三三「小竹の葉(ささの葉)はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば(柿本人麻呂)」*枕(まくら)三〇六・日のいとうららとなるに「小舟を見やることいみじけれ、遠きはまことに、ささの葉を作りてうち散らしたるにこそ、いとよう似たれ」
〔2〕湯立(ゆだて)の巫女(みこ)が神託を受ける時に持つ熊笹の葉。*雛俳・柳多留二五「笛の葉へ折々からみだれれ」*雛俳・柳多留四「(神の声色)葉(は)額へ当て」
〔3〕酒をいう。*和英語林集成(再版)「Sasanoha サナノハ・小竹葉(説)」
〔4〕ささのはがい(笛葉貝)に同じ。**開闢(は)之回**

〔金ア〕 **開闢(は)之回** 「ささまき(笛巻)〔1〕に同じ。*御湯殿上日記・文明九年三月二五日「きたこうちとのよりこうはい廿。ささのまきまいる」

ささの巻(まき) 「ささまき(笛巻)〔1〕に同じ。*御湯殿上日記・文明九年三月二五日「きたこうちとのよりこうはい廿。ささのまきまいる」

ささの丸(まる) 紋所の名。葉のついた竹を束ねて円形にしたものの。*開闢(は)之回

ささの丸屋(まるや) 笛の葉で屋根をふいたそのままつた家の笛(ふき)の仮家。*隣女集三・ふわしあびぬけ乱れて霜氷のまろやのよはのさむしろ

ささの餅(もち) 〔1〕竹の実。自然杭(じねんご)。
〔2〕酒の粕をいう女房詞。*日葡辞書「Sassanoni(ササノニ)。すなわち、サケノカス(説)酒をしばつた後に残る残滓。女性語」**開闢(は)之回**

ささの餅(もち) 〔1〕竹の実。自然杭(じねんご)。
〔2〕酒の粕をいう女房詞。*日葡辞書「Sassanoni(ササノニ)。すなわち、サケノカス(説)酒をしばつた後に残る残滓。女性語」**開闢(は)之回**

ささの名(な) 岩手県や仙台で、着物の襦(まち)をいう。*襷名之事「ささげ(豇豆)」をいう女房詞。*大上萬葉名之事「ささげ(豇豆)」・女重宝記(元禄五年)一五「ささげはささ」・女中詞(元禄五年)「ささとは小角豆」
ささの脇葉(わきば) (笛竹の横に出た末の葉の意)直系から分かれた系統の人をいう。傍系。支系。*狹衣物語「むかし人の代りには、ささのわきばにても頬(むくび)べきやうに、言ひ契りしかひなう」

ささの名(な) 植物「ささげ(豇豆)」をいう女房詞。*大上萬葉名之事「ささげ(豇豆)」・女重宝記(元禄五年)一五「ささげはささ」・女中詞(元禄五年)「ささとは

やどりを誰か知るべき」
ささの雪(ゆき) 〔1〕綱漉豆腐(きぬい)しどうふの風雅な呼び方。そのなめらかさを、笛の葉に積もった淡雪に見立てたものとい。淡雪豆腐(あゆきどうふ)。
〔2〕豆腐料理の一つ。文化文政(一八〇四~一九)ころから、江戸根岸新田(東京都台東区根岸)の料亭で売り出された、葛餡(くずあん)をかけた綱漉豆腐。吉原帰りの客で繁昌し、根岸名物となつたる酒肴。紅葉豆腐も笛(ササ)の雪(ユキ)現在に至る。また、その店名となる。*人情本・花街寿寿女一下「笛(ササ)の雪(ユキ)は當時流行でござりますがあまり上品過て、私しなさア矢張藏前(かうか)*浮雲(うきよ)葉亭四迷一六『芝居はマア芝居として、如何です。明後日団子坂(菊見)といふ奴は』略『笛の雪ぢゃないかネ』正可(まさか)と(3)笛に積もった雪がすぐ落ちるように、首や胴がすぐに落ちることを表現して、武士が刀につけられた名。*武家名目抄「刀劍部・簫・雪・増補家忠日記云天正十二年四月九日(略)池田が刀へ簫の雪と号す」
〔3〕笛に積もった雪を因圖化したもの。雪持笛。
〔4〕紋所の名。笛の上の積もった雪を因圖化したもの。雪持笛。
〔金ア〕 **開闢(は)之回** 「ささまき(笛巻)〔1〕に同じ。*御湯殿上日記・文明九年三月二五日「きたこうちとのよりこうはい廿。ささのまきまいる」

ささの脇葉(わきば) (笛竹の横に出た末の葉の意)直系から分かれた系統の人をいう。傍系。支系。*狹衣物語「むかし人の代りには、ささのわきばにても頬(むくび)べきやうに、言ひ契りしかひなう」

ささの名(な) 植物「ささげ(豇豆)」をいう女房詞。*大上萬葉名之事「ささげ(豇豆)」・女重宝記(元禄五年)一五「ささげはささ」・女中詞(元禄五年)「ささとは

ささの名(な) 因言(1)植物。あさ(麻)。秋田・大分両県一部
ささ(2)あま(亞麻)。新潟県一部
ささ(3)佐々(アサヒ)姓氏の一。*開闢(は)之回

ささ(4)一些(アサヒ)形動タリ「すこしうがりのさま。わずかにえて、勢強大になるにあれば、人の心おのづから傲りて些々(ササ)たる事をも巨大にいひなし」
*福翁白話・福沢諭吉五「然かも其照応の正確なるは絶対の真にして、些々(ササ)たる人間などの瞞着を許さるものなり」*旧唐書・陽嗣復伝「近日事亦漸好、未免一些不公、亦無甚処」**開闢(は)之回**

ささいな

さーさ【嵯峨】『形動タリ』高く険しいさま。嵯峨。草枕(夏目漱石)「一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して灘き水の折れ曲る角に、嵯峨々と構へる右側には」
【発音】
さーさ【瑣瑣】『形動タリ』こまかいさま。こまごまとしているさま。また、くだくたらしいさま。*本朝文粹・六・申民部大輔状(橘直幹)「然而蒼蒼之玄遠離答、瑣瑣之素懷未遂」*西國志編(中村正直訳)五・三「然れども瑣々たる流俗の説と侮て、これを察するもの一人もなかりけり」*一家内の珍聞(国木田独歩)「折角の平和な家庭も、まことに瑣々(ササ)たる原因のために、飛んだ醜体を現はすことなる」
*詩経・小雅・節南山(瑣瑣烟垂、則無無仕)」
【発音】

さーさ【然然】『副』(副詞「さ」の重なったもの)①同意を表わす。そうそう。さうさよう。*宇津保(俊蔵)「いとうつくしげに調じたる唐鞍をとりいたして

『これはなに、すべき物ぞ』見て見すれば「さー、これ

して」とよつつかうまつるべかめり」②具体的な叙述を省略し、内容の存することだけを形的に

指示する。しかじか。*蜻蛉(下)天禄三年「今はかた

ちをもことになしてむとてなん、さきのところに月

ごろはものせらる」*蜻蛉(下)天禄三年「又の日か

べりて、さきなんといふ」*源氏・行幸「さきのことを

そそのかしかと中宮かくておはす」

さーさして「(して)は動詞「す」の連用形に助詞「て」

が付いて助詞化したもの。詳しくいいくべきところ

を省略して述べる時に用いる)これこれの事情

で。そうちかして。*蜻蛉(中)天禄二年「さとして、

まあり給ことあり」*蜻蛉(中)天禄二年「ささし

てものしたりしかど、いひずなりにき」

ささ【副】(多く「と」を伴って用いる)①風が吹く音

などを表わす語。さささ。*名語記・六・風のささ

とふく如何。娘々をいふにや。音のささときこゆる

也。*源平盛衰記三・澄憲祈雨事「扇をひろげて、殿

上をささと扇ぎ散らして」②水などが勢いよく流れたり、そそきかかたりするさまを表わす語。さ

さ。*名語記・六・水のながるるとのささ如何。さ

らさらの反ればささ也。徒然草「一四・御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までささとかかりけるを」
【発音】

ささ【感動】①はやしことば。*古事記・中・歌謡「この御酒

の御酒(みき)は我が御酒ならず(略)豊寿(はき寿

き廻(もとは)し奉(まつ)り来し御酒を残(あ)さ

ず飲(を)せ佐佐(ササ)」*古事記・中・歌謡「この御酒

(みき)の御酒のあやに転染(うただの)し佐佐(ササ)」②人に物事を勧めたり誘つたりする時に発する語。さあさあ。*滑稽本・浮世床・初・中・「ササいはんすなそこぢやて。そりや立入ぢやないとつとの横入ぢや」*歌舞伎・三人吉三廟初買・序幕「ササもう

重ねた語「大言海」。(2)祝語か「古事記伝」。

さーさ【細・小】『語素』(狭いの意の「さ」を重ねた語。後

世は、「さざ」とも)主として名詞の上に付けて、「こ

まかい」「小さ」「わざかな」の意を表わす。ささら。

さざれ。*書紀・神代下(兼方本訓)汝か生子(うみの

この)八十連属(やそつき)の裔に、貧(まぢ)鈎、狹

狹貧鈎(ササマぢち)、と言たまひ訳て」
【発音】(1)形容

詞サン(狹)の語根を重ねた語「大言海」。細小の義

「古今要覽稿」。(2)スキスキ(透々)の義「名言通」。

さざ【名】
①醬油(しょうゆ)の表面に浮かぶ白い微

(かび)。静岡県榛原郡本川根566 烏取県702 石見723 隠岐726

さざ【且座】『名』茶事の一種。七事式の一つ。客三人

と東(とう)亭主、半東(はんとう)亭主の補助役の

五人で催す。客三人のうち、正客は花を生け、次客は

炭をつき、三客は香をたいて、主客ともに香を聞く。

東は濃茶(こいわち)、半東は薄茶(うすちや)をたてる。といった趣向。【発音】

さざ【副】(多く「と」を伴って用いる)人々が声をた

ててさわがしいさまを表わす語。がやがや。さわざ

わ。*落葉(二)「皆ののしりて、さざとして出で給ふす

なはち、あこぎ告げに走らせやりたれば」*栄花(浦

々の別)「いかにいかにと覺し渡る程に御氣色あり。

さざとののしり騒ぐ程に、哀に頬しき方なし」*大

鏡六・道長下「これはまた聴聞衆共、さざとわらひて

まかりにき」

さざ【坐作】『名』すわることとたつこと。たらい。身

のこなし。起居。↓坐作進退。【発音】

さざ【名】
①因(圓)①川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡8②川の浅瀬。長野県上伊那郡916

さざ【副】(多く「と」を伴って用いる)①水が勢いよく流れたり。雨が激しく降ったりするさまを表わす語。さあざあ。②風にさわぐ木の葉など。物のすれあう音を表わす語。【発音】

さざーあみ【筆編】(名)編み物で、鉤針(かぎばり)を用いて、笹の葉のような模様をあらわす編み方。【発音】

さざーあめ【細雨】(名)わずかな雨。小雨。*改正増補和英語林集成(Susame サザアメ)

さざーあめ【筆餡】(名)筆の葉に餡を包んだもの。新潟県(越後の名産)。*坊っちゃん(夏目漱石)「越後

の筆餡が食べたい」と云つた」
【発音】(1)金子(金子)、(2)金子(金子)

さざーさざー【支】(名)「さざえ(支)」の変化した語。歌舞伎・小袖曾我御色縫(十六夜清心)一四立・実は出

よい、その貞節な詞を聞く上はおれも安堵ぢや

もなく」

さざーい【些細・瑣細】『名』(形動) 小したこと。わずか

なこと。だいしたことではないこと。また、そのよ

うなさま。*東海・福集一・和儀則堂謝珠荆山諸兄

見留憶昔頗好事、穉書且賦詩、乃以為瑣細」*淨

瑣瑣(仮名手本忠臣蔵)六見れば家内に取込も有そ

ふな。イヤもふ瑣細(ササイ)な内訳事」*滑稽本浮

世風呂三・上「さるたぐひの些細(ササイ)なるうが

ちは、ものうしとてここにしるさす」*蘇軾種松詩

「初移一寸根、瑣細如插秧」
【発音】(1)形容

詞サン(狭)の語根を重ねた語「大言海」。細小の義

「古今要覽稿」。(2)スキスキ(透々)の義「名言通」。

さざ【名】
①因(圓)醬油(しょうゆ)の表面に浮かぶ白い微

(かび)。静岡県榛原郡本川根566 烏取県702 石見723 隠岐726

さざ【且座】『名』茶事の一種。七事式の一つ。客三人

と東(とう)亭主、半東(はんとう)亭主の補助役の

五人で催す。客三人のうち、正客は花を生け、次客は

炭をつき、三客は香をたいて、主客ともに香を聞く。

東は濃茶(こいわち)、半東は薄茶(うすちや)をたてる。といった趣向。【発音】

さざ【副】(多く「と」を伴って用いる)人々が声をた

ててさわがしいさまを表わす語。がやがや。さわざ

わ。*落葉(二)「皆ののしりて、さざとして出で給ふす

なはち、あこぎ告げに走らせやりたれば」*栄花(浦

々の別)「いかにいかにと覺し渡る程に御氣色あり。

さざとののしり騒ぐ程に、哀に頬しき方なし」*大

鏡六・道長下「これはまた聴聞衆共、さざとわらひて

まかりにき」

さざ【坐作】『名』すわることとたつこと。たらい。身

のこなし。起居。↓坐作進退。【発音】

さざ【名】
①因(圓)①川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡8②川の浅瀬。長野県上伊那郡916

さざーあみ【筆編】(名)編み物で、鉤針(かぎばり)を

明応天正・舞頭・黒木・易林書

さざーあめ【米螺】(名)①「さざえ(米螺)」の変化した語。

*言繼卿記天文一五年三月二〇日「予又内々へ參、さ

さい數十被下之」*日葡辭書(Sazai(サザイ)へ訳)あ

る種の貝」*元和本下学集「米螺(ササイ)・浮世草

子・風流曲三味線三・二・「時(の)有野郎弘法大師へ願を

かけてさざいを断ち」*昭本・鯛の味噌津米螺(客四

人と亭主と五人の算用にて、米螺(サザイ)を五つか

ひ」②(「さざいどう」の略)「さざえどう(米螺

堂)」に同じ。*雜俳・柳多留一六「釜のふた明く日に

さざいにへこぼれ」*補註(さざいの子見出しは「さ

ざえ」の項にまとめた。【発音】

明応天正・舞頭・黒木・易林書

さざーい【瑣細】(名)「さざえ(瑣細)」の異名。*色葉字

類抄(反舌)ササイ」*名語記八「小鳥の名にさざい

いはやきの反。さてさざい也。この鳥が春はさへづ

りてうぐひすといはる也」*雜俳・村雀(楊柳)も小

雀(ササイ)が身には五人張」*雜俳・狂俳玉柏(一)「柏

葉ガサガサ・路次下駄へ来てサザイ啼く」*方言(京都

66(さざえ)下絶94*色葉(和王・伊京)

さざーい【剣利】(名)剣の葉のような模様をあらわす編み方。【発音】

さざーい【剣利】(名)①劇毒性的ない草の根や木の皮

を細かくさざんでつくるたる薬剤。煎じたりなどして

服用する。②「さや(座葉)」に同じ。【発音】

さざーい【座葉】(名)葉の葉を包んだもの。新潟

県(越後の名産)。*坊っちゃん(夏目漱石)「越後

の筆餡が食べたい」と云つた」
【発音】(1)金子(金子)、(2)金子(金子)

さざーい【支】(名)「さざえ(支)」の変化した語。歌舞伎・小袖曾我御色縫(十六夜清心)一四立・実は出

試读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbook.com

ささか
さえし

といが未詳。ささえ。ささえおどり。古今打聞、中「小々江小鳥(ササエコトリ)」。古今打聞、中「かきねつたふさえ小鳥よは行て驚きそへ春のまうけに赤人」。ささえ小鳥よは驚のおや也。驚も老ぬれは、ささえといふとなりなる也。ささえこ鳥とづくへし。

ささえじょう。さあへシヤウ。【支状】[名]自分の立場が正当であることを主張する文書。また、鎌倉・室町幕府の訴訟手続で、訴人原告の提出した訴状に対して、論入(被告)が弁明のために提出する陳述をいう。しじょう。*文明本節用集「支状 ササエジヤウ 訴訟之時用」之。
〔国語〕文明伊京・明応・雞頭・黒木易林

ささえじり。【螺尻】[名](1)サザエの殻の先のらせん状になつた部分。足都の岩屋説本「耳の音を聞く説は丁と此の耳の穴は近く云はば、螺尻じりのやうに成つて」。(2)(サザエの尻が巻いているところから)心のねじけた人のたとえ。ささいじり。

〔国語〕
ささえぞなえ。ぞなへ。【螺備】[名]「さざいぞなえ(采螺備)」と同じ。

ささえだて。さあへ。【支立】[名]('だて'は接尾語)邪魔をすること。妨害すること。歌舞伎、暫(日本古歌)全書所収、「邪魔な額故、取りおろすを、さあへ立(ダテ)なす不居者めが」。歌舞伎・大和名所千本桟橋「立目こしゃくな女のさあへ立て、邪魔せとぞ遣せ」。

ささえつき。【螺突】[名]漁具の一つ。一筋ぐらの竹竿の先端に鉄製の三叉(みづま)をつけ、サザエを突きさして捕えるもの。
〔国語〕會(アマ)

ささえつりこみあし。さあへ。【支釣込足】[名]柔道の投げ技の一つ。相手の体を釣つて前脚にくししながら、足の裏で相手の出した足の下端を支えて、ねじるよう投げる足技。
〔国語〕會(アマ)

ささえとう。タウ。【螺堂】[名]内部の階段が螺旋梯

子(らせんばしこ)に似た構造になつてゐる堂。江戸

本所五つ目(あつた五百羅漢寺の三匝堂(さんそうどう))が有名であつた。現存するもの

に福島県会津若松市、飯盛山のささえ堂がある。ささえ。さいと



螺 堂

江戸名所図会

多留一五。「親に似た迄は數える螺堂」。歌舞伎音聞浅間幻燈画・五幕「五つ目羅漢の大坊主、それ出たやれ出たぐるぐる廻るささえ堂」。開國サザエド一(無マフ)
ささえひとむ。さあへ。【支留・支止】[他マ下二]動こと。また、その人。
さえども。をおさえてとめる。*有樂門・森鷗外「車掌は從容として右の脚を差し伸べ、この小き反抗者を支へ留(トド)めて」。開國會(アマ)

ささえとり。【采螺取】[名](1)海でサザエをとること。
(2)「ささえばさみ(采螺抜)」に同じ。
〔国語〕會(アマ)

ささえばさみ。【采螺抜】[名]機にいるサザエをとる道具の一種。竹竿の先に櫛の木を四つ割りにし、先を

開いた状態にしてとりつけたものや竹竿の先を二つつぱりにしたものがある。螺取り。
〔国語〕會(アマ)

ささえぱしり。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて防ぎ支えるために立てる柱。つつかいぱしら。

ささえぱしき。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて防ぎ支えるために立てる柱。つつかいぱしら。

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて防ぎ支えるために立てる柱。つつかいぱしら。

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて火をともすものという。采螺のともしび。
〔国語〕會(アマ)

〔国語〕會(アマ)

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて火をともすものという。采螺のともしび。
〔国語〕會(アマ)

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて火をともすものという。采螺のともしび。
〔国語〕會(アマ)

〔国語〕會(アマ)

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて火をともすものという。采螺のともしび。
〔国語〕會(アマ)

〔国語〕會(アマ)

さえび。【采螺燈】[名]昔、金山などで、坑内に持つて火をともすものという。采螺のともしび。
〔国語〕會(アマ)

的に、または経済的に援助する。支援する。*二人比丘尼色懺悔(尾崎紅葉)。戰場「自害は得遂げず・恩愛の手に障(サナ)えられ」。(4)相手の勢いをくいとめ^{うめ}、防ぎとめる。平家一八・法住寺合戰「禰の小野太が二百騎ばかりでささへたる川原坂の勢の中へ、をめいて懸(ヒヨク)り」。名語記八「さざるといへる事実をまで悪くしる。中傷する。

如何。支也。したしたはむの反。やうき事をとどむる義也。歌舞伎・小袖曾我齋芭翁(サカガキ)。

五立「御息女の御難見るに忍びず、狼藉者をさされました斗り」。(3)事実をまで悪くしる。中傷する。

〔国語〕會(アマ)

会を抜けて帰ると。開國會(アマ)

集団旅・草枕。ささがきうすきあしの屋は、ところせきまで袖を露(アマ)

きまく「伏見の豊後橋の片陰に筆塙(ササガキ)をむすび、略世を慕(アマ)

がき」。開國ササガキ(アマ)

〔国語〕會(アマ)

秩父 242
ささかに【細蟹・笹蟹】〔名〕①「くも(蜘蛛)」の異名。
また、くもの糸。→枕詞「ささがね」の補注。古
今・恋五・七七三「今はとわびにしものをささがに
の衣にかかりわれたのむみ人しらず」*蜻
蛉上・天暦一〇年「吹く風につけてもとはむささ
にのかよひしみちは空にたゆとも」*源氏賢木
日本紀一六「佐差戦能ささがに」へ佐々蟹也。
謂「蜘蛛」也。私記曰、山名也。又説、蜘蛛之別名也。
言其跡如蟹。住々原故云々」*元和本下学集「蜘蛛
クモ 日本俗云「蟹」(ササカニ)之也」②「さ
わがに(沂蟹)」の異名。重訂本草綱目博蒙四一・龜
鼈「石蟹はへ略ささがに 和州、さはがに 水戸」
さわがに(沂蟹)。大和九奈良県69 德島県86 宮崎県
南那珂郡飫肥別 開拓ササガニ 繪文下學

文明・伊京・明応・天正・蟹蟹・黒木・書画

ささかに【の家(いえ)】蜘蛛(くもの)の巣。また、く
もの巣だけの家。「細蟹の網(い)」に「家」をかけ
ていう。*浮世草子・諸道聽耳世間猿二・三「いつ
売払うて仕廻(しまう)たやら略残る物とては、
ささ蟹(カニ)の家ばかりにて」
ささがに【の糸(いと)】蜘蛛(くもの)糸。「引き渡
る」「繰り返し」などの序詞としても用いられる。
*桂宮本経信集たれか住む宿のつまともしらなく
にはかなくかけるささがにのいと・山家集下
ささがに【のいと】貴ぬく露の玉を懸けて飾れる
世にこそありけれ」*謡曲遊行柳「蜘蛛(ちぢゆ
う)の乗りて細蟹(ささがに)の糸引き渡る姿よ
り」*仮名草子恨の介下「ささがにのいと繰り返
し繰り返し、及ばぬ怨と思し召」
ささがに【の細蟹】(ささがに)は蜘蛛(くもの)の異
名①「蜘蛛(くも)」にかかる。古今・墨滅哥。一
一〇「我が背子が来べき宵也ささがにのくものふ
るまひかねてしるしも(衣通姫)・玉葉雑三・二二
五九「ささがにの蜘蛛のふるまひあはれなりこれ
にかかる。後拾遺・雜三・一〇〇四「思ひやる我が衣
手はささがにのくもぬ空に雨のみぞ降る東三条
院」*新拾遺・雜春・六六五「ささがにの雲のはた
または同音を含む「蜘蛛手(くも)」・雲「曇る」など
にかかる。後拾遺・雜三・一〇〇四「思ひやる我が衣
手はささがにのくもぬ空に雨のみぞ降る東三条
院」*新拾遺・雜春・六六五「ささがにの雲のはた
ての郭公來べき宵とや空に待つらん」*仮名草子・恨
の介下「ささがにの雲でに物や思ふらむ達ふて
思の遣る方も憂き身の果ぞ悲しけれ」③蜘蛛
の糸といふところから、「糸」および「糸」と同音また
は同音を含む訓詞「しと」や動詞「いとぶ(厭)」などに

かかる。落葉一「恋しくもおもほゆるかなささが
にのいととけづのみ見ゆるしきに」*拾遺・雜秋。

には家のうしろでまつるともいう。開拓ササガニ
繪文下學

ささかに【細蟹・笹蟹】〔名〕地名。「和名
抄」にいう、近江国蒲生(かまぶ)郡篠寄(ささき)郷。
上代、大彦命の子孫、狹城山君(ささきのやまと)のき
みが住み、中古、佐佐木莊となり、宇多源氏雅言の孫
成頼が入部して庄となつた。中世には近江源氏を
称する佐々木氏の本領地であった。現在の滋賀県蒲
生郡安土町と八日市市との一部にあたり、沙沙貴神
社や佐佐木城(觀音寺城)址などがある。書紀孝元
七年二月(北野本南北朝期訓)「兄大彦命(いろねのを
すらしも)」*後拾遺・恋三・七六九「蜘蛛手(さへ)かき絶
えにけるささがにの命を今は何にかけまし(馬内
侍)」*統古今・恋五・一三八〇「折々にかくとは見え
てささかにのいかに思へばたゆるなるらん(よみ
しらず)」開拓書紀允恭八年二月・歌謡「我が背
子が来べき宵なり佐差戦能(ササガネノ)の蜘蛛(く
も)」行ひ今宵著(しる)しも」①の「古今集」例の原歌
に見られる上代の「ささがねの(「笹の根」の意)が
中古以降「ささがに」の形で伝えられたことによ
る。一方、「ささがに」も蜘蛛の異名と考えられるよ
うになる。開拓ササガニ 繪文下學

ささかに【細蟹】(蜘蛛(くも)が糸をかけること)
とにちなんていう)琴座の首星、織女星の異称。
《季・秋》*俳諧・増山の井・七月・七夕 あさかはひめ
たきものひめ、ささかに姫 *俳諧・句拾遺・秋「か
ねて知るささがに姫や来べき宵(素云)」*和歌真竹
集四「七夕の七姫といふはたきもの姫 ささがに
姫 横の葉姫 略以上織女(異名也)」開拓ササガニ
ヒメ 繪文下學

ささかね【名】「ささがに(細蟹)」の変化した語。
ささかね【筆根】(運語)筆の根も。また、筆の生
し繰り返し、及ばぬ怨と思し召」
ささがに【の細蟹】(ささがに)は蜘蛛(くもの)の異
名①「蜘蛛(くも)」にかかる。古今・墨滅哥。一
一〇「我が背子が来べき宵也ささがにのくものふ
るまひかねてしるしも(衣通姫)・玉葉雑三・二二
五九「ささがにの蜘蛛のふるまひあはれなりこれ
にかかる。後拾遺・雜三・一〇〇四「思ひやる我が衣
手はささがにのくもぬ空に雨のみぞ降る東三条
院」*新拾遺・雜春・六六五「ささがにの雲のはた
ての郭公來べき宵とや空に待つらん」*仮名草子・恨
の介下「ささがにの雲でに物や思ふらむ達ふて
思の遣る方も憂き身の果ぞ悲しけれ」③蜘蛛
の糸といふところから、「糸」および「糸」と同音また
は同音を含む訓詞「しと」や動詞「いとぶ(厭)」などに

神。笹竹三本をねじって下を広げて立て、うどん、そ
ば、赤飯などを供える。二月には家の前庭、一二月
には家のうしろでまつるともいう。開拓ササガニ
繪文下學

ささかや【名】妾宅、隠居、別宅の類をいう、盜人仲間
の隠語。(隠語轉覽)

ささかや【筆蓋】〔名〕イネ科の一年草。各地の山野
にいどかれる夕露のいつまでとのみ思ふものか
いどかれる夕露のいつまでとのみ思ふものか
く許まつる心を(源順)・風雅・恋四・一三〇八「絶
えねば思ふも悲しささがにのいとはながらかか
るちぎりは(藤原為家)」*式子内親王集「ささがにの
命」今などにかかる。蜻蛉下・天延二年「ささが
にのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞ
すらしも」*後拾遺・恋三・七六九「蜘蛛手(さへ)かき絶
えにけるささがにの命を今は何にかけまし(馬内
侍)」*統古今・恋五・一三八〇「折々にかくとは見え
てささかにのいかに思へばたゆるなるらん(よみ
しらず)」開拓書紀允恭八年二月・歌謡「我が背
子が来べき宵なり佐差戦能(ササガネノ)の蜘蛛(く
も)」行ひ今宵著(しる)しも」①の「古今集」例の原歌
に見られる上代の「ささがねの(「笹の根」の意)が
中古以降「ささがに」の形で伝えられたことによ
る。一方、「ささがに」も蜘蛛の異名と考えられるよ
うになる。開拓ササガニ 繪文下學

ささかる【方舟】因縁 うるさく触れたりして邪魔にな
りで落ち着いて物事ができない。岩手県氣仙郡33
かる)高知県長岡郡大豊42 (未処理の事などが気が
かりで落ち着いて物事ができない。岩手県氣仙郡33
かしたびらめ(赤舌鰐)。宮城県30 仙台42 やなぎ
むしかれい(柳虫蝶)。新潟県・丹後・兵庫県崎郡香
住028

ささかわ【筆川】(「ささがわ」とも) 福島県郡山市の地名。江戸時代は奥州街道の須賀川と日出
山の間にあった宿駅。〔3〕千葉県香取郡東庄町の地
名。明治末期までの利根川の河港。成田線が通じる。開拓ササガニ

ささかわ【筆川】(「ささかわ」とも)姓氏の一
つ。開拓ササガニ 繪文下學

ささかわ【筆根】(運語)筆の根も。また、筆の生
し繰り返し、及ばぬ怨と思し召」
ささがに【の細蟹】(ささがに)は蜘蛛(くもの)の異
名①「蜘蛛(くも)」にかかる。古今・墨滅哥。一
一〇「我が背子が来べき宵也ささがにのくものふ
るまひかねてしるしも(衣通姫)・玉葉雑三・二二
五九「ささがにの蜘蛛のふるまひあはれなりこれ
にかかる。後拾遺・雜三・一〇〇四「思ひやる我が衣
手はささがにのくもぬ空に雨のみぞ降る東三条
院」*新拾遺・雜春・六六五「ささがにの雲のはた
ての郭公來べき宵とや空に待つらん」*仮名草子・恨
の介下「ささがにの雲でに物や思ふらむ達ふて
思の遣る方も憂き身の果ぞ悲しけれ」③蜘蛛
の糸といふところから、「糸」および「糸」と同音また
は同音を含む訓詞「しと」や動詞「いとぶ(厭)」などに

ささかね【筆蓋】〔名〕筆の根も。また、筆の生
し繰り返し、及ばぬ怨と思し召」
ささがに【の細蟹】(ささがに)は蜘蛛(くもの)の異
名①「蜘蛛(くも)」にかかる。古今・墨滅哥。一
一〇「我が背子が来べき宵也ささがにのくものふ
るまひかねてしるしも(衣通姫)・玉葉雑三・二二
五九「ささがにの蜘蛛のふるまひあはれなりこれ
にかかる。後拾遺・雜三・一〇〇四「思ひやる我が衣
手はささがにのくもぬ空に雨のみぞ降る東三条
院」*新拾遺・雜春・六六五「ささがにの雲のはた
ての郭公來べき宵とや空に待つらん」*仮名草子・恨
の介下「ささがにの雲でに物や思ふらむ達ふて
思の遣る方も憂き身の果ぞ悲しけれ」③蜘蛛
の糸といふところから、「糸」および「糸」と同音また
は同音を含む訓詞「しと」や動詞「いとぶ(厭)」などに

ささかね【筆蓋】〔名〕筆の葉の形に似せてつ
くった蒲鉾。仙台地方の名産。

ささがみ【筆神】〔名〕茨城県の筑波山周辺から栃木
県にかけての地方で、二月と二月の八日につまる

のことで口論となつたが、やがて仲直りをして、梶原

康治元・元久二年(一四一・一〇五)

ささかね【筆蓋】〔名〕筆の葉の形に似せてつ
くった蒲鉾。仙台地方の名産。

ささがみ【筆神】〔名〕茨城県の筑波山周辺から栃木
県にかけての地方で、二月と二月の八日につまる

のことで口論となつたが、やがて仲直りをして、梶原

康治元・元久二年(一四一・一〇五)

ささかね【筆蓋】〔名〕筆の葉の形に似せてつ
くった蒲鉾。仙台地方の名産。

ささがみ【筆神】〔名〕茨城県の筑波山周辺から栃木
県にかけての地方で、二月と二月の八日につまる

のことで口論となつたが、やがて仲直りをして、梶原

康治元・元久二年(一四一・一〇五)

ささき・そういち【佐々木惣二】憲法・行政法学者。鳥取県出身。京都帝大卒。憲法および行政法の権威として美濃部達吉とともに公法学界の中心的存在であった。京大事件で大学自治確立に努力、滝川事件で退官。立命館大學長。第二次世界大戦後、新憲法作成の審議に加わり、「佐々木試案」を作った。文化勲章受章。著書「日本行政法原論」「日本憲法論」など。明治一一～昭和四〇年(一八七八～一九六五)

ささき・たかうじ【佐々木高氏】南北朝時代の武将。

近江国(滋賀県)の豪族。号、道誉。四郎と称した。京極宗氏の子。はじめ北条高時に仕えたが、のち足利尊氏に従い、室町幕府創設に功があつて、近江、上総、出雲などの守護をかねる。歌道、香道、茶道のたしなみも深かつた。徳治元～応安六年(一三〇六～七三)

ささき・たかおき【佐々木隆興】医学者。東京出身。東京帝大卒。京大教授、杏林堂病院長、佐々木研究所所長、癌研・結核各所長を歴任。たんばく質アミノ酸の研究、肝臓癌人工発生の研究でそれぞれ学士院賞を受賞した。文化勲章受章。明治一一～昭和四年(一八七八～一九六六)

ささき・たかつな【佐々木高綱】鎌倉初期の武将。四郎と称した。定綱の弟。母は源義義の女。源頼朝の挙兵に参じ、石橋山の戦いで軍功を立てる。宇治川の合戦では名馬生駒(いけづき)で梶原景季と先陣を争い名をあげ、功によって備前、安芸、周防などの守護となつた。のち實の薄いのを恨んで出家。生没年不詳。

ささき・たかゆき【佐々木高行】政治家。侯爵。土佐藩出身。初名は高富・高春(通称三四郎)。早くから勤王の志を抱き、土佐倒幕運動の中心となる。明治三年(一八七〇)参議となり、のち司法大臣(たゆう)、工部卿、枢密院顧問官などを歴任。天保元年(一八三〇)～明治四年(一八七一)

ささき・たかより【佐々木高頼】室町時代の武将。近江の名族で、六角氏を称する。父政頼。初名四郎。近江國守護。応仁の乱に、山名宗全の下で細川氏の兵を破り、その後、細川勝元に属した京極氏と近江を争い、これに勝つ。乱後、近江にある多くの諸領を獲得し、管理した。永正一七年(一五六〇)没。

ささき・ちゅうじろう【佐々木忠次郎】昆虫学者。近代養蚕学・製糸学の開拓者。福井県出身。東京大学卒業。東京帝大農業学部教授。主著に「農作物害虫篇」。安政四～昭和一三年(一八五七～一九三八)

ささき・ちゅうたく【佐々木仲沢】蘭医。岩手の人。大槻玄沢について蘭学を修め、仙台藩医学校教授となる。仙台藩最初の人体解剖を行ない「存真図

跋」を著わす。寛政二～嘉永元年(一七九〇～一八四八年)

ささき・とうよう【佐々木東洋】医学者。江戸の人。

佐藤泰然のもとで医学を修める。西南の役に軍医として活躍。のち、脚氣病院の主任を経て、杏雲堂病院の前身を開設した。明治二三年(一八九〇)には東京医会を創立して会長となつた。天保一〇～大正七年(一八三九～一九一八)

ささき・のぶつな【佐佐木信綱】国文学者。歌人。東京帝大卒。三重県出身。佐木弘綱の長男。号は竹柏園。和歌の歴史的研究、万葉の基礎的研究に尽力。明治和歌革新運動を起こし竹柏会を設立。機関誌「心の花」を刊行した。著編書に「万葉集の研究」「校本万葉集」。歌集に「おもひ草」「豊旗雲」。

門下に川田順九、三条武子がいる。明治五～昭和八年(一八七二～一九六三)

ささき・ひろつな【佐佐木弘綱】国学者。歌人。伊勢石薬師の生まれ。信綱の父。号は竹柏園。著書に「古事記歌俚言解」。文政一一～明治二十四年(一八二八～一九〇九)

ささき・みつぞう【佐々木味津三】小説家。本名光三(みつぞう)。愛知県出身。明治大学政経科卒業。「右門捕物帖」「旗本退屈男」などを書き、大衆文学の分野で活躍した。明治二九～昭和九年(一八九六～一九三四)

ささき・もさく【佐佐木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・虹豆【名】「ささき(豇豆)」の変化した語。季夏・羅荀日辞書「Cicer arietinum (ササギノ) タグイ」。日本「鑑窮河話海」五・花木豆腮脣氣(ササギ)固遇密(クマミ)遇慶(マメ)・饅頭屋節用集「小角豆(ササギ)・淨瑠璃・艳狩剣本地」(季夏)・羅荀日辞書「Cicer arietinum (ササギノ) タグイ」。日本「鑑窮河話海」五・花木豆腮脣氣(ササギ)固遇密(クマミ)遇慶(マメ)・饅頭屋節用集「小角豆(ササギ)」。

ささき・つき【名】衣服の袖に「ささけ(豇豆)」をつけること。また、その衣服。ささげつけ。歌舞伎天下る。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・つる【名】「ささき(豇豆)」の変化した語。和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々伎神社】滋賀県蒲生郡安土町にある神社。旧県社。祭神は少彦名命(すくなひこなのみこと)、大彦命(おおひこのみこと)。彦土神(うぶすながみ)として崇敬された。(開闢會)

ささき・じんじゅ【沙沙貴神社】滋賀県蒲生郡但東町にある神社。旧県社。祭神は少彦名命(すくなひこなのみこと)、大彦命(おおひこのみこと)。彦土神(うぶすながみ)として崇敬された。(開闢會)

ささき・じんじゅ【佐佐木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

ささき・じんじゅ【佐々木茂索】小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三五)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外食」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七～昭和四年(一八九四～一九六六)

代は「ささき」。平安には「ささき」形がみられるが、第二拍、第三拍の清濁はゆれていたらしい。今安平坂(ささき)を著わす。寛政二～嘉永元年(一七九〇～一八一〇)安(一〇〇〇)。

ささき・とうよう【佐々木東洋】医学者。江戸の人。

佐藤泰然のもとで医学を修める。西南の役に軍医として活躍。のち、脚氣病院の主任を経て、杏雲堂病院の前身を開設した。明治二三年(一八九〇)には東京医会を創立して会長となつた。天保一〇～

ささき・あぶみ【佐佐木簾】(名)「ささきあぶみ(佐佐木掛)」と同じ。御伽草子・草木太平記(有朋堂文庫所蔵)に記載。馬具の簾(あぶみ)の名。

ささき・あぶみ【佐佐木掛】(名)馬具の簾(あぶみ)をかぶせて云ふ。馬の太刀をささき、とう駒にささき簾(あぶみ)をかぶせたり」

ささき・あぶみ【佐佐木掛】(名)馬具の簾(あぶみ)をかぶせたり」

ささき・あぶみ【佐佐木掛】(名)酒に酔つたときの気分。

好馬芸、而善馭へ略推曰「佐々木流」(開闢會)

リュー・兼^フ回

ささき・茶杓(名)抹茶(まっちゃ)をくすくいとする。

用いる。細く小さいさじ。竹、象牙、水牛、金属器、木地(まじ)、塗物などで作り、珠光形、利休形などが

ある。ちやしゃく。ちやさじ。俳諧・新增大鏡波集・油槽夏(あまり暑さにかがみこそすれ若竹をささくにせむと火を置て)

ささく・差錯(名)いり乱れるごと。くいらがうこと。転じて、あやまり。まちがい。手違い。哲字彙意かとする。万葉集一六・三七九「古(いにしへ)」Error・差錯・過失・謬誤・青春(小栗風葉春)「円鏡」日野掛。隨筆・貞丈雜記一二「佐々木掛といふ」(佐々木掛)に差錯(ササク)をささき(ササキ)に差錯(ササク)をかぶせたり

収「菖蒲作りの太刀をささき」とう駒にささき簾(あぶみ)の名。

ささき・かげ【佐佐木掛】(名)馬具の簾(あぶみ)の名。

ささぐり——ささける

黄褐色。草木の葉の上にすみ、網は張らない。動作はすばやく、小さなガなどの昆虫に飛びついて捕える。

本州以南の日本各地に分布。(2)「くさぐも(草蜘蛛)」の異名。・重訂本草綱目啓蒙三六・卵生「草蜘蛛」ささぐもくさぐもはしりぐも江戸開闢ササギモ(無之)□

ささぐり【筆縁】(名)建築で、肘木(ひじき)の上端、巻斗(まきと)と巻斗との間を薄くえぐりとった部

分。水縁(みずぐり)。

ささぐり【筆栗小栗】(名)(1)(実の小さい栗の意)

植物「しばぐり(柴栗)」の異名。《季秋》十卷本和名抄一九「杣子 崔禹食經云杣子上音元一名鷹栗^{ハサク}久利^ル栗相似而細小者也」山家集下「山

風に峯のささぐりはらはらと庭に落ちしく大原の里」*俳諧笈日記下芭蕉庵十三夜「人々をまねき、瓢を扣(たたき)き、峯のささぐりを白鳩(はくあ)と誇る」(2)菓子の一種。栗の実を煮てつぶし、餡をかぶせて棒状にしたものを竹皮に包んで蒸した菓子。

岐阜県中津川市名物菓子。開闢(1)について)ササグリ(細小栗の義)日本駅名箋注和名抄・大言海》。発音ササグリ(無之)□今史①は平安●●●○(京)

团(慶應和名・色葉・名義・書画)

ささぐれ【名】指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、裂けて割れたりすること。

また、そうなつたもの。さかむけ。*雑俳・柳多留三

五「琴爪をはめさされをうば出かし」*小鳥の巢(鉛木三重吉)下・七「いつの間にか俯向いて簾のささ

くれを拂りながら、それとなく父の事を考へ続けるやうな事もあつた」*暗夜行路(志賀直哉)一・一〇「そして殆ど無意識に親指のさされをむしり出した」開闢(名)金子サカクレ(岡山)ササクリ(秋田)ソソグレ(山形・福島)開闢(京)○

ささくれだつ【自タ五(四)】ささくれた状態になる。ささくれで目立つ。目にくほなどさくれる。

*三四郎・夏目漱石四「白く柔かな針を集めた様にささくれ立(タ)つ」*徳田秋声二「縁のささくれ立った目尻、絵具の赤々した井などあつた」開闢(京)○

团(余之)□

ささぐれ【名】(1)指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、さてわれたりする。*改正増補和英林集(ユビ・カワガササケヌエ)〔ササクレル〕道草夏目漱石九五「さ

ささぐれ【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。小鳥の巣(鉛木三重吉)下・二「何の原因ともなく不愉快な、ささくれた気分を見守った」忠義・芥川龍之介「が、それは、ささくれた神経の方で、許さない」開闢(名)ササケル(東京・対馬)開闢(京)○

ささぐる【名】(1)指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、さてわれたりする。*改正増補和英林集成(ユビ・カワガササケヌエ)〔ササクレル〕道草夏目漱石九五「さ

ささぐれ【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。ささぐれ【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。ささぐれ【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。

*小鳥の巣(鉛木三重吉)下・二「何の原因ともなく不愉快な、ささくれた気分を見守った」忠義・芥川龍之介「が、それは、ささくれた神経の方で、許さない」開闢(名)ササケル(東京・対馬)開闢(京)○

ささぐる【名】(1)指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、さてわれたりする。*改正増補和英林集成(ユビ・カワガササケヌエ)〔ササクレル〕道草夏目漱石九五「さ

ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。

*小鳥の巣(鉛木三重吉)下・二「何の原因ともなく不愉快な、ささくれた気分を見守った」忠義・芥川

龍之介「が、それは、ささくれた神経の方で、許さない」開闢(名)ササケル(東京・対馬)開闢(京)○

ささぐる【名】(1)指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、さてわれたりする。*改正増補和英林集成(ユビ・カワガササケヌエ)〔ササクレル〕道草夏目漱石九五「さ

ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。

*小鳥の巣(鉛木三重吉)下・二「何の原因ともなく不愉快な、ささくれた気分を見守った」忠義・芥川

龍之介「が、それは、ささくれた神経の方で、許さない」開闢(名)ササケル(東京・対馬)開闢(京)○

ささぐる【名】(1)指の爪ぎわや、物の先端などが細かくむけてめぐりあがつたり、さてわれたりする。*改正増補和英林集成(ユビ・カワガササケヌエ)〔ササクレル〕道草夏目漱石九五「さ

ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。ささぐる【名】(2)感情がとげとげしく荒れる。



(2)《新長画》
ささぐれ若菜
雑種(初回模様)

ささぐろめ【名】簾(しの)を結いめぐらしてかこいとした所。*新撰六帖六山がつての簾は垣根のささぐろめにぎはよまでの柄とはみし藤原信寒』

ささぐわ・くわ・くわ【名】(1)世桑【名】植物「やまぐわ(山桑)」の異名。*重訂本草綱目啓蒙三三・灌木「桑(ささぐわ)」一名花

ささぐわ【名】(2)高知県安芸郡東川82(ささぐわ)土佐町

ささぐわ【名】太平洋岸各地の漁村で女性が水桶その他を頭の上にのせて運ぶ頭上運搬をいう。

近くまで上げる。*萬葉一九・四二〇四「吾が背子が青き棒(ささげ)て持てるはほがしはあたかも似るか青き蓋(きぬがさ)・惠行」・靈異記上・「紺(あけ)の纏(かづら)を額(ぬか)に著け、赤き幡絆(はたはこ)を擎(ささげ)て、馬に乗りへ興福寺本願院擎(ささげ)天」・源氏宿木主の頭中将、さかづきささげて御台まるる・*大慈恩寺三藏法師伝承久四年点一「一の僧をして鮮(あさやか)なる華一盤を擎(ささげ)使め、來りて法師に授けしむ」②上へ高くあげる。高くさしあげる。かかる。*小川本願院四分律平安初期点「此の尼拘律の樹は手を挙(ささげ)れば頭に及べりき」・竹取(つばくらめ)子産まむとする時は尾をさげて七度めぐりてなむ。産み落すめる」枕一「二十五・むとくなるものおほきなる木の風に吹き倒され、根をさげ横たはれ臥せる」③(2)から得意になつて見せびらかす。誇示する。*仮名草子・伊曾保物語一下・二〇「人としてわが誉(ほまれ)をささぐる時は、人の憎みをかうむりて、果てにはあまりをいひ出さるる物なりけれ」④神仏あるいは死者に供物をたてまつる。供える。*仮名歌「祝迎(さか)の御足跡(みあと)石(いは)に写し置き敬ひて後の仏に譲りまつらむ佐々義(ササギ)まうさむ」・大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点一〇「人有りて栴檀末香を賣(ささげ)て至れり」・平家一・康頼祝言「求長寿得長寿の礼拝、袖をつらね、幣帛(へいはく)礼拝を捧(ささげ)高良本ルどり事ひまなし」⑤目下の者から目上の者へ物をたてまつる。献上する。献納する。*書紀・雄略一二年一〇月(国書寮本訓)「彼の疾く行くを恵びて、庭に顕作(だら)れて、擎(ささげ)る所の饌(みつけもの)を覆(こぼ)し」・源氏・若紫「ところにつけたる御贈り物どもさげたてまつり給ふ」・大淵代抄「今日本でも六月にはどの山よりか内裏へ水りよ捧げる云ふも其の礼とみへた」⑥高い大きな声を出す。声をはりあげる。*栄花「もとのしづく「おど御声をささげて泣きのしり給へど」・古本説話集一〇「程もなく、震う声さげて詠みあぐ」・たまきはるの御つほとまりりて、声をささげさせ、さまざまの事申して」⑦自分の真心や愛情などを相手に示し、さし出す。相手に尽くす。そぞぐ。*圓剛幼兒を用便のため抱きあげて前へ差し出す。広島県比婆郡別徳島県八五
翻譯(1)サシニア(指揮)の約和解・萬葉集類林・円珠庵雜記・和訓葉・大言海。(2)シモニナケクの反ソ・サグの軸(名語記)。開闢サガケル(金)余乙。(3)ささぐ・ササグ(金)今史平安〇〇〇〇
ささげわたす【捧渡】「他サ四」芭(しとみ)などを全部上方へあける。*大和二条家本付載「西の京六条わたりに築地(ついぢ)所々崩れて草生ひしげりて、

さすがに所々茆(しとみ)あまたささげわたしたる所あり」
○センチば。コイサギに似ているが小さい。雌雄同色で頭上部は藍黒色、くび腹面は灰色、背面は青緑色を帯び、後頭に長い冠毛がある。樹林に営巢し、夜間に水辺に出で水生の小動物を食べる。アジア東部で繁殖し、日本には主として本州以南に夏鳥として渡来。みのこい。アムールさぎ。(季・夏)

ささこし【狹小興】(名)京都貴船神社の鳥。全長約五センチ。コキ(五位)サギ科の鳥。

ささこし【笛子鳴】(名)サギ科の鳥。全長約五センチ。コイサギに似ているが小さい。雌雄同色で頭上部は藍黒色、くび腹面は灰色、背面は青緑色を帯び、後頭に長い冠毛がある。樹林に営巢し、夜間に水辺に出で水生の小動物を食べる。アジア東部で繁殖し、日本には主として本州以南に夏鳥として渡来。みのこい。アムールさぎ。(季・夏)

ささこし【狹小興】(名)京都貴船神社の祭礼に振り歩く小さな神輿(みこし)。江戸時代、貴船神社の九月の祭に、一日から九日までの間、京都の子どもが市中をかつぎまわった小型のもの。後奈良天皇の時、九月に小児の疫病がはやつたのを貴船の神のたたりとし、小さく神輿を造つてこれをしずめたことに始まるという。*日次紀事一月一日「貴布禪神供 貴布禪狹小神輿(ササコシ)自今日一至九日・洛下兒童昇小神輿(謂貴船狹小神輿)」名所都鳥六、貴布禪社「小き神輿を昇貴舟の狹小輿(チャチャヤゴシ)ササコシ」と呼つて、町を歩行く此事所々にありといへども、別して子供あつまるは、本誓願寺通小川のはとり今に有。開闢(金)

ささこじて【簾籠手】(名)「しのじて(簾籠手)」に同じ。読本・椿説弓張月・残・六二回「荒男等五六十人、黒き衣に黒き頭巾を戴たる、簾肱(ササゴテ)に木皮の脚綱(あゆび)して長き刀を跨(よこたへ)たる」・読本・南総里見八犬伝四・三一回「倒れたる一個ひとりの武士は細鑑(こくさり)の着籠勒肚(きこみはらまき)して、平金の簾籠手(ササコテ)に龜甲入たる脚盾(すねあて)したる」

ささこじて【捧】(連語)「ささげて」の意の上代東国方言。ささげ持つて。*萬葉一・二〇・四三・五「父母も花もがもやくさまくら旅は行くとも佐佐(ササ)ゴテ行かむ(丈部黒当)」

ささこじと【酒事】(名)「さかごと(酒事)」に同じ。浮世草子・浮世栄花一代男一三・「なる程小盃にてしゃく取は淀の人すみ濁るをや神ぞ知るらん男まぜのささ事」といふ・淨増璣・冥途飛脚一中「女郎さまたちが大せい遊びにござんしてお客待つ間のささこと」

*清元・深山櫻及兼樹(保名)「うつらうつらと夜をあかひるねぬ程に思ひつめたまに逢ふ夜の簾しささことやめて語る夜は」
ささこじと【酒事】(名)「さかごと(酒事)」に同じ。浮世草子・浮世栄花一代男一三・「なる程小盃にてしゃく取は淀の人すみ濁るをや神ぞ知るらん男まぜのささ事」といふ・淨増璣・冥途飛脚一中「女郎さまたちが大せい遊びにござんしてお客待つ間のささこと」
の義、デンは塵。米を菩薩(さざなみ)といふところから「東雅」(2)ササヂン(酒塵)の義(和訓葉)。(3)ササジン(酒塵)の義(假言集覽・大言海)。(4)ササを米と解する説は(1)菩薩の字を略して井と書くところからササは菩薩の義、デンは塵。米を菩薩(さざなみ)といふところから「東雅」(2)ササヂン(酒塵)の義(和訓葉)。(3)ササジン(酒塵)の義(假言集覽・大言海)。(4)ササを米と解する説は(1)菩薩の字を略して井と書くところからササは菩薩の義、デンは塵。米を菩薩(さざなみ)といふところから「東雅」(2)ササヂン(酒塵)の義(和訓葉)。(3)ササジン(酒塵)の義(假言集覽・大言海)。(4)ササを米と解する説は(1)菩薩の字を略して井と書くところからササは菩薩の義、デンは塵。米を菩薩(さざなみ)といふところから「東雅」(2)ササヂン(酒塵)の義(和訓葉)。(3)ササジン(酒塵)の義(假言集覽・大言海)。(4)ササを米と解する説は

國鉄中央本線笛子駅と初鹿野(はじかの)駅の間にある鉄道トンネル。明治五年(一九〇二)完成。全長四六五六尺。
①甲州街道(国道二〇号線)・山梨県大月市と大和村の間にある道路トンネル。昭和三三年(一九五八)開通。全長二九五三尺。
トネル(金)
ささこじー【笛子餅】(名)山梨県大月市笛子の名物で小判形の餡(あん)入りの餅。開闢ササゴモチ(金)
ささこじー【笛子餅】(名)富士登山者の宿泊のため山中をかつぎまわった小型のもの。後奈良天皇の時、室の宿舎のこと。このごや。*日次紀事六月「此月處々民人攀(登)富士山へ路(坂路)中間岩窟構(小屋)是謂(小屋)ササゴヤ」(金)
ささじま【笛島】(「ささしま」とも)姓氏の一つ。開闢(金)

ささじまやき【笛島焼】(名)陶器の一つ。尾張国笛島村(名古屋市中村区笛島町付近)で焼かれた素燒の一種。文化年間(一八〇四一八)、文七といいう者が焼きはじめたという。尾張名所図会前編二・愛知郡(古事類苑・産業一三)「笛島焼、磁器。広井なる笛島にて製す。近來の新製にして、樂焼の模様さまざまに色とり、美しき陶器なり」(金)
ささじん【笛島】(「ささしま」とも)姓氏の一つ。開闢(金)
ささじまやき【笛島焼】(名)陶器の一つ。尾張国笛島村(名古屋市中村区笛島町付近)で焼かれた素燒の一種。文化年間(一八〇四一八)、文七といいう者が焼きはじめたといいう。尾張名所図会前編二・愛知郡(古事類苑・産業一三)「笛島焼、磁器。広井なる笛島にて製す。近來の新製にして、樂焼の模様さまざまに色とり、美しき陶器なり」(金)
ささじー【笛竹】(名)小さい竹の総称。また、それを描いた模様。「俳諧虚栗下・酒債尋常往來有人生七十古来稀(笛竹)のとてらを藍に染(ぬ)して芭蕉(符場)の雲に若殿を恋(其角)」・赤光(斎藤茂吉)死にたまふ母(山ゆゑ)に笛竹の子を食ひにけりははそはの母よははそはの母よ」(金)
ささじたけ【笛竹】(名)小枝の総称。また、それを描いた模様。「俳諧虚栗下・酒債尋常往來有人生七十古来稀(笛竹)のとてらを藍に染(ぬ)して芭蕉(符場)の雲に若殿を恋(其角)」・赤光(斎藤茂吉)死にたまふ母(山ゆゑ)に笛竹の子を食ひにけりははそはの母よははそはの母よ」(金)
ささじたけ【笛竹】(名)抱子菌類(ウセンタケ科)に属する肉桂色のキノコ。かさは径一~五センチ。茎は三~八センチ。松林に生じ食用とする。(金)
ささじたけ【笛竹】(名)小枝の総称。また、それを描いた模様。「俳諧虚栗下・酒債尋常往來有人生七十古来稀(笛竹)のとてらを藍に染(ぬ)して芭蕉(符場)の雲に若殿を恋(其角)」・赤光(斎藤茂吉)死にたまふ母(山ゆゑ)に笛竹の子を食ひにけりははそはの母よははそはの母よ」(金)
ささだけの【笛竹】(名)①「大宮人」「大内山」にかかる。上代の枕詞「さすだけ」が、中世以降変化したものか。→さすだけの。「拾遺愚草」中「散りませじ衣にされるささ竹の大宮人のかさず桜は」・王二集大鑑一・三「麿(しづく)の家の糠味噌迄も酒塵(ササヂン)と言葉を改め物毎(ものごと)やさしくよきを見習ひ」・女重宝記(元禄五年)・五「ごとそはささちん」・東雅一・三「穀(略俗)間に、糠味噌といふもの、糠と塩とを和して造れるを名づけて、ささちゃんといふ也。是は仏經を書写するに、苦薩の字の文を省きて井としるす事あり。さればササとは苦薩の義也。ぢんとは塵といふ字の音をもて呼ぶ也」(金)
ささだけの【笛竹】(名)大宮人に初音待たれて巖山院(金)
ささだけの【笛竹】(名)①「大宮人」「大内山」にかかる。上代の枕詞「さすだけ」が、中世以降変化したものか。→さすだけの。「拾遺愚草」中「散りませじ衣にされるささ竹の大宮人のかさず桜は」・王二集大鑑一・三「麿(しづく)の家の糠味噌迄も酒塵(ササヂン)と言葉を改め物毎(ものごと)やさしくよきを見習ひ」・女重宝記(元禄五年)・五「ごとそはささちん」・東雅一・三「穀(略俗)間に、糠味噌といふもの、糠と塩とを和して造れるを名づけて、ささちゃんといふ也。是は仏經を書写するに、苦薩の字の文を省きて井としるす事あり。さればササとは苦薩の義也。ぢんとは塵といふ字の音をもて呼ぶ也」(金)
ささだち【笛團子】(名)①团子を笛の枝にさした向市美々津(金)
ささだち【笛團子】(名)①团子を笛の枝にさした向市美々津(金)

ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)①团子を笛の枝にさした向市美々津(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)

ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)
ささだち【笛團子】(名)江戸時代、大坂の歌舞伎の最鼎(ひき)連中の団体の名。
*雜俳(鏡磨)にぎやかな笛せし画室のさびれ笛子鳴く」(金)

を除るとしてあらそひ取る事。近辺氏子の家より出で道にて団子は皆取られ穀竹計神前へ納め、是神事のやうに成」②うるち米の粉ともち米の粉をこねて館(あん)を入れ笹の葉で包んで蒸したもの。新潟県の名物。**発音**ササダンゴ(繪ア図)

さざちまき【笹縫】**〔名〕** 笹の葉でくるんでつくった縫。笹を三角に畳み、これにもち米とおるち米を混ぜて荒びきにしたものを入れて結び、蒸したもので、砂糖入りのきな粉をつけて食べる。長野県山ノ内町などの名物。笹巻縫。**季夏***宗長日記「人の許より篠縫・せんべい二色送られして心ざしよりまのしげき縫数は千秋千百いにして」**俳諧・毛吹草追** 加一上「原のさざ縫と云ふを聞いてたばねてやらの篠縫令巾」**俳諧・八番日記**「猫の子のほどく手つきや笹縫(さざちまき)」**発音**ササヒ

さざつり【検察】**〔名〕** 情況を視察すること。***西国立志編 中村正直訳**八、二五「自ら倫敦(ロンドン)中の貧人院に往き、その中の委曲を査察し」***条約改正論**島田三郎、「其差異の程度を比較せす事情の如何を検察せず」**発音**ササツリ(余ア)**○**

さざづくり【筆作】**〔名〕** ①刀剣の緑頭(ぶちがしら)や鏃(じり)などに筆の葉の模様をつけること。また、その刀。②キスやサヨリなどの身の細い魚を刺身にする時の切り方。三枚におろした身を斜めに切ると切り口が筆の形になるのでこの名がある。

発音ササヅクニ(因)

さざづけ【酒筒】**〔名〕** 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。**さけづけ**。**発音**ササヅケ(○)

さざつて【名】**因** 因明後日。あさつて。愛知県知多郡河和58^②あさつて。福井県43信濃53岐阜県536愛知県碧海郡58三重県44鹿児島県種子島89宝島98^③やのあさつて。秋田県山本郡54山形県村山166^④さざつと【筆葉】**〔名〕** (つと)は包み物、土産物の意。筆の葉で包んで作ったつと。**俳諧・続猿狂上**「何ぞの時は山伏になる(曲翠)筆と棒に付(つけ)たるはさみ箱(臥高)」**発音**ササツト(○)

さざつーは【筆葉】**〔名〕** (さざば)は(筆葉)の変化した語。**洒落本・自惚鏡・武さ**「何やら、さざつーの先きへすずをつけたよふに、さわさわばかりしていくて」**売花翁**「藤綠雨朝夕てん屋物を取寄せて食れもせぬ雀(ササ)つ葉(べ)の代まで払ふ仕儀となりてふざげ」**因富**「**〔名〕** 笹の葉。群馬県佐波郡26^(さざば)滋賀県彦根69^②竹の葉。静岡県島田56^(か)余乙(○)

さざつばた【名】植物「からたちばな(唐橘)」の異名。**重訂本草綱目啓蒙**九山草「百両金からたちばな」**○**余乙(○)余乙(○)

さざつばた【名】植物「しばぐり(柴栗)」の異名。**ササドグリ**〔繪ア図〕

さざつばた芸州

さざつばた【名】**〔筆印〕**〔名〕「さざばたき(筆印)」の変化した語。**滑稽本浮世風呂前上**「お禰宜(ねぎ)どもの占(うらねこ)も、市女(いちご)の筆(ササ)」**○**ばたきもいらねへ

さざつべい【筆縫】**〔名〕**「さざへり(筆縫)」の変化した語。

さざづま【筆縫】**〔名〕**着物の縫の形が、細長く、筆の葉のようになつたもの。多くは男子用。**・雜俳 新編柳**樽(二三)「筆縫に気がね姫の蔽(ひ)にらめ」**発音**ササヅマ(○)

さざづめ【筆爪】**〔名〕**五徳で爪の上方の曲がりぐあいが、筆の葉を折つたような形のもの。その爪の長いものを長筆または大長爪、短いものを中爪、小さいものを小筆または小爪という。

さざづる【筆蔓】**〔名〕**①筆の葉を蔓草にかたどつたような模様。**②**さざづるぎれ(筆蔓)切の略。**古今物類聚**「名物裂之部」「**〔名〕**筆つる」**発音**ササヅル(因)

さざづるぎれ【筆蔓切・筆蔓裂】**〔名〕**黄緑地に筆の葉に似た蔓草を模様に織りだした縫子(どんす)。名物切(めいぶつぎれ)の一つで中国明代のもの。また、その模品。筆蔓縫子(さざづるどんす)。さざづる。**歌舞伎・与話情浮名**横櫛(切られ与二)一五幕「おとみが守りと一ついの縫もつながるさざづるぎれ」**発音**ササヅルギレ(繪ア)**○**



筆蔓(①)《雅遊漫録》

さざなぎ【細菜葱】**〔名〕**植物「こなぎ(小菜葱)」の異名。**季春***日本植物名集「松村任三」「ササナギ」**鴨舌草**名。**沙羅**人の涙は號もおり(蓼太く)「常磐津・花の動詞化」**さざなぎ**「笛鳴・小鳴」**自力四**、「さざなぎ(筆鳴)柏集・俳闇興行」**契けむ竹とさざ鳴(なぐ)うぐひすと沙羅」**人**の涙は號もおり(蓼太く)「室のむめ筆なきかける蕉菜など納豆の朝ことに」**歌沢巡る日**「さき啼きかける黃鳥(うぐひす)の來ては朝寝を起しけり」**発音**ササナギ(○)**

さざなみ【細波・小波・漣】**〔名〕**①「古くは『さざなみ』の波が吹いて立つ細かく小さな波。さざなみ」**細波**・**小波**・**漣**■**〔名〕**②「古くは『さざなみ』の波が越す安寧に降る小雨間も置きてわが思はなくして作者未詳」*名語記「九『さざなみ如何。しばしばなみ也。たびたびかなる心也。又云しばしばなみといへる也』*広本拾玉集「汀にもあるらぬみ。さざれこなみ。万葉一二三四六左佐浪(ササナミ)」**細波**・**小波**・**漣**■**〔名〕**③「細波のように斑文のある草毛。**幸若・馬搗**「さざなみあしげといふ馬に白鞍をかせ」**発音**ササナミシバナミの義(名語記)。**細波**會史^{上代}は「さざなみ」**鎌倉**以降は「さざなみ」か。**○**余乙(○)古辭書字譯・和玉・文明 伊京天正・鶴頭・黒本易林書

さざなみ【名】鳥「ちようびけい(長尾鶲)」の異名。**発音**ササナミ(○)

さざなみおり【連織】**〔名〕**馬の毛色の名。灰色の細波のよう^にに壁糸と生糸とを二本、または一本ずつ交互に打ち込んで、漣のように小さな糸を立てた織物。**○**余乙(○)

さざなみあしげ【細波草毛】**〔名〕**馬の毛色の名。灰色の細波のよう^にに壁糸と生糸とを二本、または一本ずつ交互に打ち込んで、漣のように小さな糸を立てた織物。**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波返】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波返】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

さざなみかえし

【細波】**〔名〕**長刀(なぎなた)などの使い方の名。**・淨瑠璃**「金平恋之山入一五元よりあたる長刀の切ってには、こむて、なぐて、ひらくて、さざなみかへし・水車・とんぼうむすび」**○**余乙(○)

上鬼城「蘆さくや琵琶湖に落つるさざ流れ」**発音**ササナガレ(繪ア)**○**余乙(○)

さざなみ【筆縫】**〔名〕**冬、鷺(うぐいす)の子の名物。新潟県の名物。新潟市(うらねこ)も、市女(いちご)の筆(ササ)

さざなみ【筆縫】**〔名〕**冬、鷺(うぐいす)の子の名物。新潟市(うらねこ)も、市女(いちご)の筆(ササ)

ささはなみ

の流れを汲みて さざ波の寄り来る人にあらへて「崇徳院」¹ *新葉冬四四六・志賀の浦や月澄み渡るさざ浪の夜はすがら千鳥鳴くなり後村上院²」

期の私家集。八巻。清水浜臣作の詠歌をその子の光房が編纂したもの。文政二年(一八二九)刊。四季恋・雜・雜体に部類し、短歌一六二首、旋頭歌七首を収める。〔開口サザナミノヤシユ〕〔繪之〕

さざなみのやしゅう さざなみのやシフ【泊泊合集】江戸後河内編³もく【小波全】名 板の木目の一種。こまかい波状になつたもの。

さざなみや【細波】(さざなみや)とも。(1)近江「志賀」長等「三井など、近江国(滋賀県)琵琶湖南西岸の地名にかかる。*神楽歌小前張細波(「本」佐々奈見也(サナミヤ)滋賀の辛崎や御船(みしね)ぬ)揚(つ)く女の佳さ⁴*拾遺⁵雜上四八三「さざなみや近江の宮は名のみして霞たなびき宮モりなし柿本人麻呂」拾遺哀傷⁶一三三六「さざなみや志賀の浦風いかばかり心の内の涼しきるん(藤原公任)」千載春上六六「さざなみや志賀の都はあれにしきを昔ながらの山ざくらかなみな人しらす」

(2)さざ波が寄る意から、「寄る」にかかる。*新続古今恋⁷一五一五「さざ波やよるべも知らず成にけり逢ふはかた田のあまの檜舟(道玄)」(3)さざ波の寄せる浜の意から、「浜」にかかる。*語曲、閑寺小町

「近江の湖(うみ)のさざ波や、浜の真砂は尽くるとも

も、浜の真砂は尽くるとも、詠む言の葉はよも尽きじ⁸*淨瑠璃・頬光跡日論⁹三「さざなみや志賀の浜砂は尽くるとも源氏の御代はよも尽きじ」

さざなみのや【細鳴】自ラ四 小刻みに鳴る。小さな音をたてて鳴る。*桐一葉坪内逍遙¹⁰二一「何にもせよ、桜が枝に黄金(こがね)の鈴、月に照りはえ、さざ

さざなみのよ【細鳴】水などが少し湧ること。わずかにごり。*俳諧芭蕉庵小文庫夏草公鳴や湖水のあさにごり丈草¹¹〔開口ササニヨリ〕〔繪之〕

さざなみのよ【細鳴】(名)植物「つばめおもと(兼)萬年青」の異名。*日本植物名鑑松村任三「タウチサウササニントウツバメヲモト」〔開口ササニントウ〕〔繪之〕

さざなみのよ【細鳴】(名)雨漏りを誇張していう語。雨などがざあざ漏ること。*浮世草子・西鶴置土産四・三「取ぶきやわのさざぬけるを、此四年も齋(ふき)かへる事のなりかぬる人」浮世草子・傾城色三味線一京

「我家のとりよき屋根のさざぬけを葺かへる力もなくて」*雜俳湯たらひ「これはさて仮のうへがざぬけじや」

さざぬまりゅう : リュウ【笛沼流】(名)水泳の流派の一

つ。向井流の高弟、下総国佐倉藩士笛沼勝用が唱え

たもの。その泳法は向井流と同じ。〔開口ササヌマリ〕

ユー〔繪之〕

さざの【崔野】姓氏の一つ。〔開口ササニヨリ〕

さざの「」〔開口ササニヨリ〕

たもの。その泳法は向井流と同じ。〔開口ササヌマリ〕

ノハクサ 淡竹葉

さざのは「」〔開口ササニヨリ〕

さざばーうし【笛葉牛】(名)「かたつむり(蝸牛)」の異名。〔開口ササヌマリ〕

さざばーえんこさく【笛葉櫻】(名)因幡植物、うらじろがし

さざばーかせし【笛葉楓】(名)植物「ささバカセ

ク〔開口ササ〕

さざばーさんらん【笛葉蘭】(名)ラン科の多年草。

さざばーさんらん【笛葉銀蘭】(名)ラン科の多年草。

さざばーさんらん【笛葉金蘭】(名)ラン科の多年草。

り)を合わせて、略字として用いる「井」の字。片仮名のサの字を二つ合わせたように見えるところからい。*俳諧・統一夜松前集 浅井梅若氏興行「筆にすさう。・
寺補(どうみょうじほし)の中に餡(あん)を入れ、
むササ菩薩まで法(のり)の秋扇(あ)衣もぬらさず
越る河の瀬(几草)」
【 笹巻】
①餅菓子の一つ。蒸した道明
餡。*河明り岡本かの子「籠河岸(へつつひがし)の
笠巻の餡が持出された」
【 笹巻】多くの地方では端午の
節供の食物だが、山形県鮎海郡飛島では、初春の魂祭
に供え岐阜県揖斐郡では屋根葺きの祝いに投げる。
【 笹巻】小形の握り餡を、笹の葉
で巻いた餡。笹で四角く包んで押した押し餡もいう。
【 笹巻】江戸時代、簾
毛抜餡。笹巻。*隨筆・皇都午睡一初下・下籠河岸(へつつひがし)に笹巻餡とて、一宛 笠の葉に巻て売
家有。此名を毛抜餡と呼ぶ
【 笹巻】
ささまき(ちまき)【 笹巻】
同じ。【 笹巻】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

【 笠幕】
ささまき(ちまき)【 笠幕】
に同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

ささまき(ちまき)【 笠幕】
同じ。【 笠幕】
ささまく(しぱい)・しばる【 笠幕芝居】
【 笠幕芝居】江戸時代、簾
(すだれ)などを幕として、寺社の境内で興行した小
芝居。*隨筆・嬉遊笑覽五下・凡寺社境内、ささま芝居は興行百日を限りて、又願ふべきものなり」
【 笠幕】

さざめむし【 名】川の流水に住んでいるカワゲラ、カゲロウの幼虫。長野県伊那地方ではこれを佃煮(つくだ)にして賞味する。『季・冬』
【 笠幕】
さざめむし【 名】十日戌(とかえび)の小宝を結びつけた笹をかついで行く時はやし文句。さざめむ(どうみょうじほし)の中に餡(あん)を入れ、さらにも蒸したのち笹で巻いたもの。さざめ(まき)。

さざめむし【 笠幕】
さざめむし【 笠幕】

さざめ【 名】波の異称。古今打聞上・わたつみの詫び

らさざめこえ海人(あま)人のうきこつむにのり釣だににして賞味する。『季・冬』
【 笠幕】
さざめ【 笠幕】

さざめ【 笠幕】
さざめ【 笠幕】

さざめ【 笠幕】
さざめ【 笠幕】

さざめ【 笠幕】
さざめ【 笠幕】

さざめむし【 名】川の流水に住んでいるカワゲラ、カゲロウの幼虫。長野県伊那地方ではこれを佃煮(つくだ)にして賞味する。『季・冬』
【 笠幕】
さざめむし【 笠幕】
さざめむし【 笠幕】

さざめ【 笠幕】
さざめ【 笠幕】

ささめき——ささやき

な空気が群衆の顔に現れて、原因不明のささめきがだんだん高くなつていった。【開道會】田団 余乙サメキ回

ささめき」と【私語】「名」ひそひそばなし。内証話。
ささめごと。ささやき」と。源氏若菜上「あやしく、うちうちはたまはする御ささめき事どもの、おのづからひるごと、心をつぶす人々多くりけり」

【開道サメキギト】金之回 国語色彩
ささめきばなし『名』にぎやかなさまにする話。歌舞伎・博多小女郎浪枕文字ヶ関元船の場とかく んな晩は賑やかにささめき話をして、縁起を祝ふがよい」

ささめく『自力四』①さやさやと音がする。小大君集「竹のありける所に、風のいみじうささめきければ」②低い声で話す。ひそひそと言ふ。耳打ちする。ささやく。【蜻蛉下】天延二年五月ある者、女神めがみには衣きぬ縫ひてたまつることよかれなれ。さしたまへとおりきてささめけば』・落葉一二「かの人々笑はせよとささめき給ふをも知らで」・枕「一七五・大藏卿ばかり耳とき人はなし」この中将に扇の絵のことへとささめけば、今、かの君立ち給ひなんにをと、いとみそかにいひ入るるを』・源氏・真木柱「この世に目なれぬまめ人をしもこれぞななごとで、ささめきさわぐ声いとするし」・栄花・初花「何事にあらんうち言ひつささめき笑ふも、恥づかしきまで思はされて」・室治拾遺一〇一・応天門の前を通りけるに、人のけはひしてささめく」

③ひそかに噂うわさをする。源氏・真木柱「おのづから人のをかしき事に、語り伝へつつ、次々に聞きもらしつつ、ありがたき世語りにそささめきける」

・栄花・浦々の別「世の中にいひささめきる事共の、あるべきさまに人々ひ定めて」・増鏡一八・あすか川「あさましき御事さへありて、それゆゑあくられさせ給へるなど」・ささめく人も侍りけり」④胸さわぎがする。【日葡辞書】ムネガ sasamegu (ササメク)

【開道】(1)ササは細小の義「大言海」。(2)上には言わず、下にさわぐという義から、ササはシナシタの反「名語記」。(3)ササメゴト(小語)の略語「類聚名物考」。

ささめく『自力四』(1)さわざめくとも、騒々しく音をたてる。さわめく。(2)さわざわと音をたてる。御伽草子・唐糸草子「八百八つのみす簾(すだれ)の凡帳もささめいて」・仮名草子・恨の介上「御堂の御簾もざざめいて、坊舎も搖(ゆらぐばかりなり)思出の記「徳富蘆花」一・「先程までやや寝(ひるむ)見へた稻が唯(た)つた瞬の間(ま)に略(く)何處を見てもさわざわざわざめして露を振りこぼして居ると」(2)大勢でにぎやかに話をして、あたりががやがする。さんざめく。落葉一「御乳母かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこび給ひ

て、ささめき騒ぎ給ひて」・平家一七・主上都落「つねの御所のかた、よにさわがしうさざめきあひて、女房達しのびねに泣きなんどし給へば」・中華若木

詩抄一中「花見の貴賤如雲如霞にて、ささめくに」

*ロドリゲス日本大文典「ラウゼイ zezeneite (ザザメイテ) ロラッタ」・淨瑠璃平家女護島三「うたひおはれば、一座の人よろこび、ささめきたまひけり」

おはれば、一座の男よろこび、ささめきたまひけり」

*黄表紙・心学早染岬上「王のごとくの男子(なんし)おもふければ、家内祝詞をのべてささめきける」

*人情本・春色梅児養美一三・三鶴「泉水の向ふはさざめく広座しき、終日過せし酒宴(さかもり)に」・青春へ小栗風葉・春二「ガヤガヤと頻り女工の群が嘈(さざめ)き過ぎた後から」

(サザメ)はなやかに時めく。

春の宵の一刻を千金と、ささめき暮らしてこそ然るべき此装と」

【開道】(1)ササは波の音で、それが樂の音

声に似るところから転義した【俚言集覽・大言海】。

(2)サラサラメクの義「言元梯」。(3)サハサハメの義。

人そよめくの意「類聚名物考」。【開道】金忠中世は「さ

ざめく」近世は「ささめく」「ささめく」の両様か。

【開道】今艺江町 ●●●● 余乙サメキギト

伊京・鏡頭・黒本・書

ささめく【私語】■【名】(1)「ささめこと」「ささめ」ととも)声をひそめて話すこと。まだそのことば。

ささやき。(1)ひそひそ話。内証話。ささめきこと。

*観智院本名義抄「私語 ササメコト」・ささめこと・

上これは伏屋(ふせや)がしたのささめことなれば、壁の耳もおぼつかなからず」(2)男女間のむつこと。

恋のささやき。【為忠集】うらやまし今宵(こよひ)はあはむ七夕(たなばた)のささめことせむ積ることのは」・仮名草子・恨の介下「よもすがらの物語、誠に

一七齋「七年の古きをここに繰返す、ささめことささめこともなく、不便(ふびん)や此(この)人生(いき)ながらの若後家なり」・人情本春色梅児養美一三、

一七齋「七年の古きをここに繰返す、ささめことささめことなく、娘心に思ふなるべし」・多情多恨

*御伽草子唐糸草子「百八八つのみす簾(すだれ)ばかりに酔はされたるたのである」■(1)「ささめこと」連歌論書。二巻。心敬著。寛正四年(一四六三)執筆。

のち改訂増補を加え、現在異本が二種ある。連歌の歴史、作り方、作法などを問答体で細かく説明したもの。中世の代表的文学論で、連歌・和歌・仏道の同一性を説き、連歌修行即仏道修行といつた人格主義的理義論を展開。

(2)ササは小さい意。人は助語「日本新名」。(3)ササミコト(小耳言)の義「言元梯」。【開道】ササミ

一は因 一は回 国語名義 下学・文明・伊京・明応・天正・鏡頭・興本・易林・書

*浮世草子・世間胸算用一四一「例年の衣(きぬ)くぱりとて、略(ささめ)て守(ささめ)りて、略(ささめ)て守(ささめ)りて」(4)江戸時代・江戸本郷があり、「笹屋の目薬」として目薬を売っていたことで有名な店。*雜俳・柳多留一一六「笹屋のけんへき御利益の善光寺」メイテ)トヲッタ・淨瑠璃平家女護島三「うたひおはれば、一座の人よろこび、ささめきたまひけり」

おはれば、一座の男よろこび、ささめきたまひけり」おはれば、一座の人よろこび、ささめきたまひけり」

おはれば、一座の人よろこび、ささめきたまひけり」おはれば、一座の人よろこび、ささめきたまひけり」

—さらさやき

とば。ひそひそ話。耳うら。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。*淨瑠璃・傾城反魂香中「あのささやきはなんじや知らぬ」聞たい迄と耳をよせ「はやり唄小杉天外」夏快き夏の囃語(サヤキ)を聞く如くである。*草わかば蒲原有明かすかに胸に「そは似たりけりかの媚にあだなる人の私語(サヤキ)」。*高瀬舟森闇外「あたりがひつそりとして、只袖に割かれる水のささやきを聞くのみである」開箋(簫)ア田余之回

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がるのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京ささやきだけ【囃竹】「名」他人に話がられないよう

に同じ。開箋(簫)ア回本木、川などのたてる小さな音もいう。*淨瑠璃・傾城反魂香中「あのささやきはなんじや知らぬ」聞たい迄と耳をよせ「はやり唄小杉天外」夏快き夏の囃語(サヤキ)を聞く如くである。*草わかば蒲原有明かすかに胸に「そは似たりけりかの媚にあだなる人の私語(サヤキ)」。*高瀬舟森闇外「あたりがひつそりとして、只袖に割かれる水のささやきを聞くのみである」開箋(簫)ア田余之回

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや

ささやきぐさ [囃草]【名】①植物「たけにぐさ」(竹似草)の異名。*書言考節用集六(蘭麻 ササヤギサ)・重訂本草綱目啓蒙一三・毒草「蘆麻」略附録博落廻(略)ささやきぐさ」2植物「あかそ(赤麻)の異名。*重訂本草綱目啓蒙一「蘆麻」(赤麻)略一種あかそと呼者あり。一名ささやきぐさ、ききしぐさ。やきはヤクで、毒をもつて倒す意か「大言海」。篠面(ササヤギサ)【書】開箋(簫)伊京ささやきごと【囃語】「名」ひそひそなし。ささめきごと。私語。ささやいこと。*伊京集【聾(ササヤギコト)テウ】開箋(簫)伊京

ささやき 千里(せんり) 内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のものれやすく、また広がのが速いこととのたとえ。こそそ三里。ささやき八丁。

補注淮南子・説林訓に「附耳之言、聞於千里」也といふ句がみられる。

ささやきの橋(はし) 夜、だれもいないのに人がささやくような音がきこえるといふ橋。越後など各地にあって、だれかが密語をかわしたといふ伝説や橋占、辻占などと関係づけられることが多い。

ささやき橋。*夫木一一熊野なるおとなし川にわたさばやささやきのはしひのびしひどくみ人しらず」。*俳諧・説枕下「代は塩爐の音なしの川幽山」からべりにささやきの橋取はなし素堂開箋(簫)ア回国語(文明書)静は腹が痛い」八町(はつちやう)・淨瑠璃・右大将鑑倉史記四(私語八町・ササヤギはつちやう)、景時聞取り、何ぢや